

甘くて苦い。

日暮 彩奈

はーっと吐く息が白く濁るのを、今日だけで何度見ただろうか。まだ街も静まり返り、辺りも薄暗い午前五時。普段ならまだ夢の中で幸せに浸っているであろうこの時間に、私は一人、高い煉瓦の花壇に体重を預けていた。ピンクのミトンに包まれていながらも、指先まで冷え切ってしまった手に息をかけながら時間が経つのを待っている。両手を擦り合わせる度に肩にかけた小さな紙袋がカサカサと音を立て、その度に心臓が小さく跳ねた。

「…渡せる、かなあ」

そつと紙袋に触れ、昨日考えたことを頭の中で何度も反復する。こういう時は最悪な場合を想定したほうが良いと分かってはいるものの、想像の中ではいつもハッピーエンドで幕が降りる。わざとと言うわけではない。だからこそ反対のことを考えられない自分を情けない、恥ずかしいとさえ思ってしまう。それがいつも一步を踏み出せない原因なのだろう。そう分かっていたながらも、今までは舞台袖でただ主役を見つめることしかできなかった。しかし今日、やつと舞台へ立つことを決心した。このまま日常を描くだけでは駄目なのだ。私は目を閉じ、もう一度頭の中で考え抜いた台詞を繰り返す。

「…うん、大丈夫」

きつと考えた通りに上手くはいかないかもしれない。けれど伝えなくてはいけないこの言葉は何としてでも伝えようと、そう心の台本に書き記した。

ピピピ、ピピピ。鋭い電子音が何度も俺の耳を刺激し鳴り響く。全身を覆った布団からこそごと片手だけを伸ばし音の主を探せば、いつものように真上にあるボタンを押した。まだ重い臉を必死にこじ開け、時刻を見れば午前六時。いつもより三十分も早くセットされた目覚ましを見つめ、もう一度眠りにつこうかと考え手をどかす。その瞬間目に飛び込んできた数字を見て跳ね起きた。

「やっべ…そうだ今日だ！」

ふかふかの布団を蹴散らし急いで制服に袖を通しスマホを掴んで階段を駆け下りる。リビングのダイニングテーブルにスマホを置けば、キッチンから聞こえる油の音を尻目に俺はすぐさま洗面台の蛇口を捻った。まるで雪のように冷たい水を両手で汲んで顔を洗う。こんな寒い季節に右の蛇口を選んだのも、しっかりと目を覚まさせ朝の準備を手短に済ませる為だった。きゅつと小さな音を立てて水を止めると、その代わりにぼたぼたと顔や髪の毛が滴が流れ落ちる。鏡の向こうの自分と見つめ合えば、寝癖のついた髪を整えていく。前髪をセットし終えたところで、二階からピピピ、と先程と同じ音が聞こえた。完全に止められることを忘れられたそれは、何度も何度も朝だということを嫌になる程知らせてくる。

「春樹ー！起きなさいー！」

「もう起きてるよ、母さん！」

キッチンから食器を重ねる音と共に聞こえてくるお決まりの言葉にいつもとは違う返事をする。すると食事の支度をしている人物は「あら」と驚いた声を漏らした。後ろ髪も整え終えると急いでリビングへ向かい、美味しそうな出来立てのスクランブルエッグとみずみずしいサラダ、そしてパンが用意された席に座った。

「もう起きてるなんて思わなかったわよ、今日何かあるの？」

一リットルの紙パックからオレンジジュースをコップに注ぎ、俺のサラダの横に置きながら不思議そうに問いかけてくる母さんに、思わず真っ赤なプチマトをフォークでぶっ刺してしまい、その汁が俺の頬に張り付いた。テーブルの中央に置かれたティッシュで拭きながら、俺はその質問に答える。

「何って今日何日だか知ってるの？」

「今日？確か十…」

うろ覚えだったのだろうか、母さんは言いかけて壁にあるカレンダーを見た。

「ああ、十四日！燃えるゴミの日だったわね！もしかしてゴミ出ししてくれるの？」

口に含んだジュースを吹き出してしまわないように必死に抑え、嬉しそうに笑う母さんの後ろに見える大量のゴミ袋を横目で見つめる。この家には三人しかいないと言うのに大量の透明の袋が並んでいた。大方母さんが昼間占拠するテレビを見て購入したにも関わらず数日で諦めたダイエツトグッズだろう。

「…絶対嫌だ…っていうか違うよ！今日はバレンタインデーだろ！？」

俺がそう言うのと母さんは特に興味を示さず「あらそうだったわね」と一言零し流し台へ向かう。母さんくらしいの年齢になると行事などどうでもいいのだろうか、そう言えば去年のクリスマスも豪華な手料理を振舞ってくれただけでクリスマス自体には何ら関心を示さなかった気がする。正月もそうだ、いつも以上に手の込んだ御節をテーブルに並べたかと思えば普段通りの生活を送っていた。今日もそうなのだろうか、だとすれば可哀想になる人物が一人いる。俺は流しの横に重ねられた食器を見つめた。

「あげないの？父さんに。クリスマスプレゼント貰ってたでしょ」

朝早く出かけて夜遅く帰ってくる仕事柄、平日はあまり俺達と顔を合わせることはない父さん。だが母さんと違って行事毎に最愛のパートナーへのプレゼントを欠かさない夫の鏡のような存在だ。それなのに母さんは毎回お返しどころかろくにお礼も言わず、ただ貰っているだけである。その度にそれでは父さんが可哀想だと言っているものの、態度を改める気はないらしい。聞いておいて何だが、きっと今日も何もせず終わるのだろう。いつもより少し甘めなスクランブルエッグを口にしながら彼女の返事を待った。

「この歳になると改まって渡すのは恥ずかしいものよ」

背中を向けたままの相手から、予想通りの答えが返ってくる。俺は「ふうん」とやるせない言葉を返した。今更どうこう言っても何も変わらないのだろう、仕方がないから代わりに安いチョコレートを買ってこようかと考えていれば、テーブルに乗ったままのスマホから呼び出し音があった。

「つてもうこんな時間かよ!?!」

時刻を見れば午前7時。早起きしたおかげで油断した。急いで口にパンを頬張れば「行ってきます!」とスクールバッグを持って玄関へ向かいいつもの赤いシューズを履いて家を出る。その間に「行つてらっしゃい」と優しい声が聞こえた。

「遅い!今何時だと思ってるの?」

「し、七時二十分です」

整わない息を無理矢理抑えれば、目の前に差し出された腕時計をそのまま読み上げた。待ち合わせ時間は七時、家から待ち合わせ場所である駅まで歩いて三十分。そもそも家を出たのが待ち合わせ時間ぴったりなのだから間に合うはずがなかった。腕時計の主にただひたすら謝っていると、その隣にいた人物が「まあまあ」と諭してくれる。

「許してやれよ、瑠衣。ハルも反省してることだしさ、そろそろ行こう?じゃないと本気で遅刻するぞ」

「ちーくん甘い!二十分も遅刻したんだよ!?!」

「二十分なら今から行けば十分間に合うだろ、ほら行くぞ」

納得のいかないような顔をしつつも俺に背を向け改札を抜ける瑠衣とそれに続く千明。俺はそれにしよぼくれながらついていった。

「そう言えばハル、なんで遅刻したんだ?お前が遅れるって珍しいよな」

ホームへの階段を降りながら、千明が後ろを振り返り俺に問いかける。その隣にいる瑠衣はまだ不機嫌そうで会話に入ってくる気配はなかった。

「あー:今日バレンタインじゃん?ちよつとでも多くのチョコ欲しいから少しオシヤレしよう」と早起きはしたんだけどさ、のんびりしてたらいつの間にか時間経ってて:」

人に説明するには些か恥ずかしい理由を述べれば、千明は「お前らしいな」と笑ってくれた。おかげで少し気が和らいだ気がした。俺達二人は幼馴染で、幼い頃から一緒に過ごしてきた。瑠衣も千明も容姿端麗頭脳明晰で、多方面から人気だった。それに比べ俺は明るいしか取り柄がないと言っても過言ではないくらいルックスも成績も良くはなかったし、同性から人気でも異性から告白されたりだなんてことは一度もなかった。バレンタインも瑠衣と母さんからしか貰ったことがなく、毎年多くの紙袋を抱えることになる瑠衣と千明が食べきれないチョコを分けてもらうのがバレンタインの風習だった。今年こそはと意気込んだものの、初っ端から遅刻してたのでは今年も期待できそうになかった。

「そんなに簡単に貰えるものじゃないわよ、チョコなんて」

ふと横から今まで会話に参戦してこなかった瑠衣が口を挟んだ。学校では大人しく真面目な瑠衣なのに、俺らの前でだけは口うるさいそこら辺にいるただのお節介な女子だ。今日だって遅刻しただけであんなに怒らなくてもいいじゃないかと内心思っていた。

「今日はやけにハルに突っ掛かるな瑠衣は:そう言えば昨日も部活来なかっただろ。何かあったのか?」

瑠衣とは違っていつでもどこでも物腰の柔らかい千明は、俺らの間で何かあったのかと心配してくる。別に、と答えようと口を開けた瞬間前から「別になんでもない！」と威勢の良い甲高い声が聞こえた。

「…その様子じゃ何かあるように見えるんだが…：そう言や瑠衣、その紙袋俺らへのチョコか？」

千明が肩にかかった小さな紙袋を指差す。今まで気づかなかったが、確かに水色とピンク色の可愛らしいレースが描かれた如何にもな紙袋が瑠衣の華奢な肩にはあった。義理とは言えどいつも手作りで手の込んだ美味しいチョコレットをくれる彼女。どうやらそのチョコだけは今年も期待して良さそうだ。しかし彼女は俺の予想に反して恥ずかし気に、けれど申し訳なさそうに口を開いた。

「…ごめん。今年は…本命がいるから、義理チョコは作らなかつた」

瑠衣の口から思いがけない言葉が出てきて驚いた。普段俺と千明で芸能人で誰が好きかという話をしている時でさえも会話に入ってこないあの瑠衣に本命がいるだなんて。しかも毎年恒例の義理チョコを作りたくもない程好きなやつがいるだなんて。正直な話、本命がいることよりも義理チョコをくれないことへのショックが大きく声をかけられないでいると、千明が「そうか」と柔らかい微笑みを見せた。

「わかつた。瑠衣の口からそういう言葉が出る日がくるなんて思ってたけど…：叶うといいな、その想い」

ぼん、と彼女の頭に手を乗せ撫でる千明。そのスマートすぎる動きに俺も瑠衣も呆気にとられていたが、次第に赤くなる顔を隠すように瑠衣は頷き「ありがとう」とただ一言そう言った。遠くから踏切の鳴る音が聞こえる。ホームにも学校へ向かう電車の到着のアナウンスが流れ始めたが、俺は紙袋をただ見つめることしか出来なかつた。

賑やかな教室に足を踏み入れれば、瑠衣と千明が囲まれ俺は外野に放り出された。これは毎年の光景で、わかつてはいたもののやっぱり残念に思いながら席へつく。未だなお脳裏にはあの紙袋が焼き付いているものの、鞆を横にかけ、今日必要になる教科書の類を用意しようとし机の中を確認する。昨日彼女が部活に参加せずに帰ってしまったのも本命へのチョコを作る為だろうか。そんなことを考えている時、指に何か触れた。カサ、と音のするそれを取り出してみると、二つに折られた便箋のようなものだった。こんなもの入れたらどうかと首を捻りつつ開いてみると、そこには可愛らしい丸い文字で【放課後下駄箱で待っています】と書かれていた。もしかして、いや、もしかしなくてもこれは。

「告白!？」

思わず大声を出してしまい、教室にいる数名の目が此方に向いた。その中には千明と瑠衣も混ざっていて、千明は興味深々といった様子で女子の輪を抜けて駆け寄ってきた。

「ハル、告白がどうしたって？」

「あ、ああ…これが机の中に入ってたさ」

便箋をそのまま彼に渡すとまじまじと見つめ、読み終わればすぐにぱっと顔を上げた。

「ハル、やったな！」

先程瑠衣に向けた微笑みとはまた別の笑顔を俺に向ける千明。自分のことのように喜んでくれる彼を見て、俺も素直にガッツポーズをした。ついにバレンタインにチョコを貰うことができそうなことが嬉しくて、その手紙の差出人が書かれていないことも、瑠衣が此方を見ていることも、紙袋も、その時は何も気にならなかった。

(どんな子、なんだろう…)

黒板にチョークで文字を書く無機物な音だけが響き渡っているはずなのに、私の中ではざわざわと朝の賑やかさが残っている。今時逆チョコというものが流行っているらしく、沢山の男子からプレゼントを貰ったけれど、誰一人として顔を覚えていない。それなのに今朝の彼の顔だけは鮮明に浮かび上がる。どうしてあんな言い方しかできないのだろうか。もっと優しい方があったのに。勿論その理由は明白で、折角考えていたプランが台無しになってしまったからである。朝伝えるはずだった。まだ片方がこない内に、自分の想いを乗せたチョコを渡すつもりだった。だけれど彼はそんな私の淡い気持ちを裏切って、いつもより遅い時間に来た。しかも他の女の子からのチョコを期待して髪の毛の分け方まで変えて。何にも気づいていない彼に少しだけ嫌気が差して、つい貴方の分のチョコはないって言ってしまった。少しは悲しんでくれていたみたいだけれど、きっとそれもチョコが貰えないことに対してだけなのだろう。教室に来てからの彼を見れば一目瞭然だった。あの手紙の主は誰なのだろう。どんな子なのだろう。もし付き合うだなんてことになってしまったらどうすれば良いのだろうか。そんな考えばかりが頭の中で交差する。幼馴染でいる期間が長すぎたのだ。少しでも意識をして貰えたら何か変わっていたのかもしれない。彼は私のことを良くしてお節介なお姉ちゃんとも思っているに違いなかった。

(…私も、高校に入ってから出会うべきだったのかな)

ちーくんと幼馴染だなんて羨ましいだなんてよく言われる。何故かって聞けばいつも一緒にいられるからって返ってくる。それは相手に恋愛対象として見られていない証拠なのに、誰もそのことに気づかない。私は物心ついた後に出会い恋をしている女の子たちがただひたすらに羨ましいのに。ぼんやりとした考えの中、私は黒板を見つめながら動かしていた手を止めた。

先程までの授業中とは打って変わり、騒めく昼休みの教室。俺と千明、そして瑠衣はいつものように教卓付近の机を並べて昼飯を食べていた。いつもは他愛ない話で盛り上がるのに、今日は三人とも黙々とご飯を口に運んでいるだけで、この部屋の中で一番静かな場所になっていた。何も話さないことに対して最初は千明が無理矢理にでも話題を振ろうとしていたが、俺も瑠衣も上の空で話が続き、とうとう諦めた様子で卵焼きを口に頬張っていた。

「…どんな子なんだろうなあ」

思わず俺の口から出た言葉に、千明が「手紙の子？」と返してくれた。

「そう、名前すら書かないってどれだけ恥ずかしがり屋なんだろう」

ポケットから出した手紙を見つめながら、授業中と同じように相手の姿を想像し始める。今日の俺の目標はチョコを貰うことだけだったのに、いつの間にか恋に発展するところまで想像している自分がいる。髪はロングだろうか、告白にはなんて答えたらかッコイのだろうか、初デートは遊園地で大はしゃぎするのがいいか、公園でのんびりするのいいかだなんて。考えただけでニヤけてしまう。

「いたずらかもしれないってこと考えないの？」

今まで黙っていた瑠衣がいきなり口を挟んできた。しかも憎まれ口を。

「何だよ瑠衣、俺に彼女ができるかもしれないことそんなに嫌か？お前だって本命にチョコ渡すんだろ？」

俺がそう言えば、彼女は一瞬動きを止めるもすぐにまたご飯を口に運ぶ。美味しいのかそうじゃないのかわからないような顔をして。朝は衝撃を受けたものの、今は瑠衣の本命はどんな奴なんだろうと想像できるようになっていた。普段本当に恋の話に無頓着に見える瑠衣のことを射止めたのだから、きつととても良い奴なのは安易に考えられるけれど、それ以上は考えられなかった。何せ瑠衣の好みのタイプというものを知らなかったからである。優しい人が好みなのか、それとも自分を引っ張っていつてくれる人がタイプなのか。

「なあ、瑠衣ってどんな男がタイプなんだ？」

そう問いかけると、瑠衣は手を止めて今度は無言で俺のこを見つめた。今朝怒られた時とは違い、なんだか泣きそうな目をしている気がして俺は「瑠衣？」と呼びかけた。すると彼女はハツとして「ハルに教える義理はない」とだけ言えばすぐに目を逸らした。今日の瑠衣はどこか変だった。それには気づいていたものの、何故そうなのかがわからない俺には声をかけることもできなかった。それに何より、手紙の主が気になってしまう俺には、声をかける資格すらないのかもしれない。

とうとう今日最後である現国の授業が終わり、部活のない生徒達が帰り支度を始め、部活がある生徒達は自分の活動場所へと向かっている。千明と瑠衣は先にバスケ部へ行くと体育館へ向かった。それを見届けてから俺は身支度を整え下駄箱へと足を動かした。教室から下駄箱まで三分もかからないはずなのに、今日はやけに長く感じる。朝走ってきた道の方が長いのではないかと思わされるくらいに。段々と近くなってくる生徒達が下駄箱の蓋を開ける音が耳に響くと同時に、俺の心臓の音もうるさくなる。見え始めたその場所に、一人の女の子がいる。肩につくぐらいの髪の毛に可愛らしくラッピングされた箱を持って。

「あ、あの」

想像とは違ったものの、とても魅力的なその子に、俺は声をかけた。

「…よかったのか？ハル追いかけて」

聞きなれた声と共に、シュートを外したボールがリズムカルに床を跳ね私のところまで転がってきた。そのボールを拾い上げれば、目を伏せ気味に声の主を見つめた。

「……気づいてたんだ、ちーくん」

「そりゃあ、幼馴染ですから」

タイムを計る私の横に腰掛けてくるちーくん。私もそれを真似してその場に座り込んだ。持ったままのボールを、大事に抱えて。

「ハルは気づいてないよ」

「あー…あいつはさ、鈍感中の鈍感だから」

ちーくんの言ったことが面白くて、「何それ」とつい笑いを零してしまう。するとちーくんは「やっと笑った」と優しく頭を撫でてくれた。

「…いいんだ、今まで何もできなかった私が悪いもの。憎まれ口しか叩けなかったから」いつかチャンスが来るだろう、そう思いながら幼馴染という立場に甘えてしまったから、想いが叶わなくなってしまうような時にも動けない。チャンスは幾らでもあった。その度に弱気になって行動に移せなかった。今日の朝だってちーくんがいる前でも渡せたはずなのに。今頃未来のお嫁さんと仲良くしているのだろうか。告白はどんな言葉でされたのだろうか、私が今朝考えていた台詞より甘い言葉だっただろうか。姿を見たこともないような人物に、これほどまでやきもちをやく日がくるとは思わなかった。

「…瑠衣はさ、いい女の子だからきつとハルよりいい人が見つかるよ」

いつの間にか頬を伝っていた涙を、ちーくんが優しく拭いてくれる。私は好きになる人を間違えたのだろうか、ちーくんみたいな私を大切に想ってくれる男の子を好きになればこんな思いしなくて済んだのかもしれない。けれどやっぱり、ハルのことが頭から離れない自分には、他の人を好きになるなんてことはできそうになかった。

「…ありがと、ちーくん」

そう口にした瞬間、体育館の扉が勢いよく開いて、頭の中を占拠していたその人が息を切らして立っていた。

オレンジ色の夕焼けが俺達を照らし、長い長い影を作る。その影を見ることもなく俺はただとぼとぼと歩いていた。俺の隣で申し訳なさそうにしている千明と、何故か目を赤くさせつつも少し嬉しそうな瑠衣が両方向から俺を見つめた。

「……ごめんな、ハル」

学校を出てから何度目かわからない謝罪をする千明の手には、先程の子から受け取ったチョコが握られていた。そう、俺が呼び出しをされた理由は、幼馴染である千明にプレゼントを渡してほしいというお願いのためだったのだ。

「いや、お前が謝ることじゃないだろ…」

折角気合を入れて行ったのにも関わらず、その相手から言われた言葉は「これ千明くんに渡してください」の一言だけで、俺も二つ返事でOKする他なかった。

彼女に何故名前を書かなかったのかと聞いてみると、俺に余計な期待をさせないようにということだった。それが俺の期待を更に高めたことなど知らずに、彼女は嬉しそうに「OKしてくれてありがとう」と答えた。その笑顔を見れば、もう何も言えなかった。

「可哀想なハル」

「うるさいな…って」

いつものように正直な感想を口にする瑠衣に文句を言おうと横を向くと、彼女は今朝持っていた紙袋から箱を取り出して俺に差し出していた。

「え、これ…」

どうしてまだ瑠衣が持っているのかと問えば、別にいいでしょと返される。ともかく受け取って中身を見てみると、計六個のチョコが並べられていた。いつものごとく手作りであろうそれは、俺の嗅覚を刺激した。

「ハルとちーくんで半分こして」

「え、でも本命に渡すんじや」

「いいの、渡せたから」

ここにこのチョコがある限り、瑠衣が本命に渡せていないことくらい俺でもわかる。なのに彼女がどうしてそんな嘘をつくのかわからなかった。隣の千明を見れば少し微笑んでいるように見えた。不思議に思ったものの、瑠衣が「食べて」と勧めてくるから、一番大きなものを手に取った。

「…じゃあ、いただきます」

一つ口に含んだそれは、去年と変わらず甘くて美味しいチョコレートだった。